

## ②当遺跡で最大となる大形の竪穴住居

1辺が約9mと当遺跡でこれまでに見つかっている竪穴住居のおよそ4倍の面積をもつ大形の竪穴住居が確認されました。時期は弥生時代の終わり頃（3世紀前半頃）と考えられ、当遺跡において最大の建物となります。また、弥生時代の竪穴住居としては県内においても最大級の規模です。

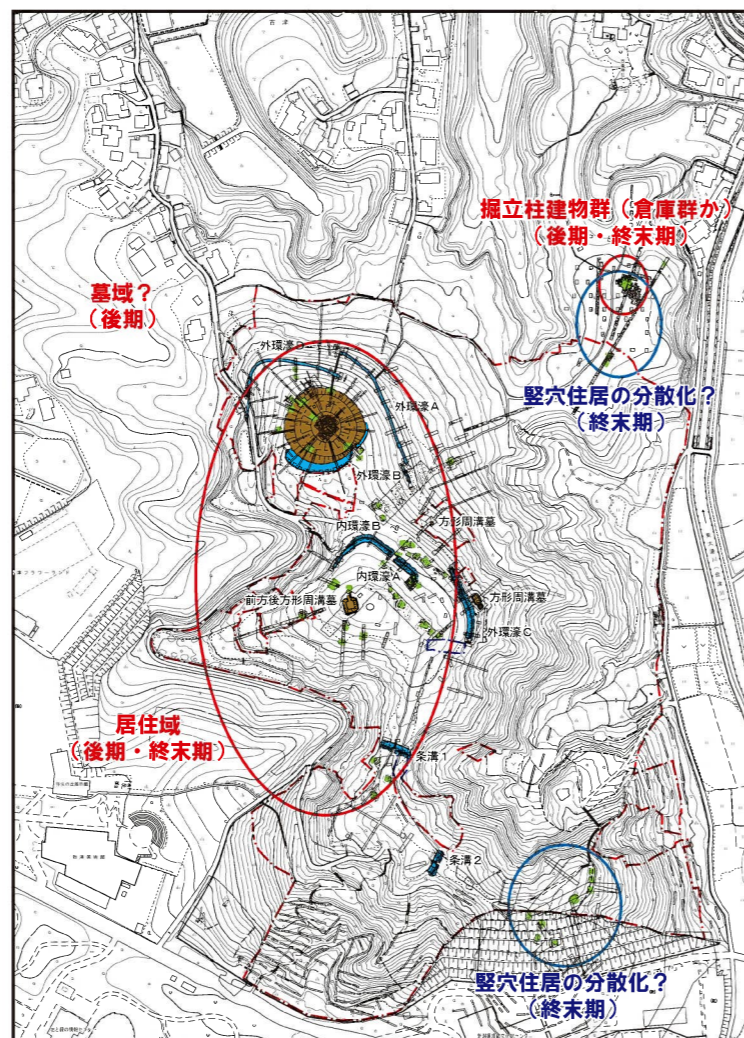


大形の竪穴住居

## 3. まとめ

初めて掘立柱建物の存在が確認されたことは、当遺跡を考えるうえで重要な成果といえます。掘立柱建物の機能については今後の検討課題ですが、現時点においては倉庫の可能性が高いと考えています。今回調査をした北東側の標高約25mと一段下がった平場の空間は、平地に比較的近く、水や米などの物資を運び入れるのには好都合な立地であるといえます。

また、弥生時代の終わり頃になると竪穴住居の分布が環濠の外側にも広がる傾向が見られます。この時期はすでに環濠の一部が埋まっている段階で、環濠の機能が低下している頃です。今回の調査で見つかった大形の竪穴住居はその頃のものです。この時期に当遺跡で最大の竪穴住居がこの場所につくられた背景については今後の検討課題ですが、最高所にある前方後方形周溝墓は大形の竪穴住居と同じ時期の墓と推測され、ムラの中で有力者が台頭してくる時期であったことを示唆します。そのような階層社会の形成が、古津八幡山遺跡において大形の竪穴住居がつくられた背景の一つにあるかもしれません。



古津八幡山遺跡における弥生時代の土地利用推定図

## 平成30年度 古津八幡山遺跡発掘調査（第21次）現地説明会資料

新潟市文化財センター

### 1. 古津八幡山遺跡の概要

標高約50mの丘陵上にある弥生時代後期（約2000年前）の大規模な高地性環濠集落で、古墳時代中期（約1600年前）には県内最大の古墳である古津八幡山古墳が築かれます。

弥生時代から古墳時代にかけての変遷や、北陸や東北との地域間関係など、当時の日本列島の社会情勢を考える上で核となる重要な遺跡であることから、平成17年に国の史跡に指定されました。



古津八幡山遺跡遠景（北東から）

弥生時代の環濠に囲まれる範囲は南北400m、東西150mほどで、これまでの発掘調査で竪穴住居が50棟以上、方形周溝墓3基、前方後方形周溝墓1基が確認されています。環濠は幅・深さとも約2mで、V字または逆台形の形をしています。この時期、中国の歴史書の中で「倭国乱」の記述が見られることなどから戦いに備えたムラと考えられています。また、古墳時代の古津八幡山古墳は直径60mの円墳で、越後平野の広い範囲を治めた豪族の墓と推定されています。

平成16年より整備事業を始め、主要エリアの整備が終わった平成27年から古津八幡山遺跡歴史の広場として全面供用を開始しています。これまでに竪穴住居7棟や環濠・土塁、方形周溝墓2基、前方後方形周溝墓1基、古津八幡山古墳の復元整備などを実施しています。

### 2. 今年度の発掘調査の目的とおもな調査成果

#### (1) 目的

国史跡古津八幡山遺跡では、平成29年度より史跡をより適切に保存・活用していくため、史跡内外における遺跡の状況を把握することを目的とした発掘調査を行っています。今年は昨年に引き続き史跡北東域の指定地外の場所について、地権者様のご理解・ご協力のもと発掘調査を実施しています。

#### (2) おもな調査成果

##### ①初めて確認された掘立柱建物

当遺跡で初めて掘立柱建物が確認されました。1棟は梁行約4.5m、桁行約6mで、近年柏崎市西岩野遺跡で確認された建物と同様の独立棟持柱建物です。他にも柱の穴が多数検出されており、複数棟の掘立柱建物の存在が明らかとなりました。掘立柱建物の多くは弥生時代の後期から終わり頃（1～3世紀頃）の時期と考えられます。



独立棟持柱建物



